

高校生 東北商店街

—東日本大震災復興貢献プロジェクト—

神奈川県立厚木商業高等学校長 風間 弘

1. はじめに

平成 23 年 3 月 11 日に発生した東北地方太平洋沖地震に始まる東日本大震災では、被災地の皆様におかれましては想像を絶する甚大な被害にあわれ、尊い命も多く失われたことに対し心からお悔やみとお見舞いを申し上げます。

神奈川県の本校においても校舎の被害も大きく、交通網、通信網が遮断され生徒の安全確保や震災後の長期にわたる節電対策などに大変苦勞した経緯があります。被災地の多くの学校で、教材・教具が津波被害に遭い、校舎が使用できない状況の学校もあるなかで、商業高校として出来る有効な復興支援策がないだろうかという話が、みなと総合高校や本校から出てきました。そこで神奈川の商業教育研究会（本部事務局：県立厚木商業）から研究会加盟高校に広く呼びかけた結果、加盟校 9 校による合同企画「東日本大震災復興貢献プロジェクト」を立ち上げ、東北 4 県の商業関係の学校を招き、「高校生 東北商店街」の実施の運びとなりました。その取り組み状況及び宮城県石巻市立女子商業高等学校に代表団を派遣し、現地の方々との懇談や被災地視察の様子などを報告します。



—一緒にがんばるぞ！

2. 東日本大震災復興貢献プロジェクト

(1) 企画について

4 月に入り、日本各地で被災地に対する義援金や物資による復興支援の動きが新聞やテレビ等で報じられ、神奈川県内の各学校においても募金活動や集まった物資の仕分け作業など高校生によるボランティア活動も始まった。その中で商業高校としての支援活動ができないか、「募るばかりでなく、開発商品等を販売して売上金を支援金にしてはどうか?」、あるいは「東北の高校生と共に一緒にできる事はないか?」など、教員や生徒の中から声があがり始めた。その取組みは「単なる募金活動でなく、東北地方の商業高校が開発した商品販売を中心に東北の観光紹介など広い視野での支援活動」と位置づけ、収益金を被災地域活性化の“資本金”として各校へ分配したいと考えた。当初は各被災地にある学校等の詳細な状況も不明であり、また準備期間も短いため、参加していただく高校に迷惑をかけぬように小規模で実施する計画であった。このような考えのもと、商業高校生らしい支援活動の話し合いを重ね、また生徒の様々なアイデアを積み重ねた結果、神奈川の商業関係の県立・市立・私立合わせて 9 校の合同企画となった。そして東北地方 4 県から 8 校の参加をいただけることとなり、神奈川の商業の力を結集しようと大規模な取組に変わっていた。

最終的に「高校生 東北商店街」という名称の合同企画となり、東北の商業高校生と神奈川県内で商業を学ぶ高校生が一緒になって横浜駅と平塚駅で被災地域の物産販売や東北地方の観光紹介などの支援活動を実施することになった。概要は次のとおりである。



横浜駅西口前での準備

(2) 事業概要

ア 事業の目的

東日本大震災において甚大なる被害が東日本の太平洋沿岸部を中心にもたらされ、その中で校舎が津波の被害に遭い、いまだ授業に校舎が使えない学校もある状況の中で、神奈川県商業教育研究会として神奈川県商業教育振興会等にも協力を仰ぎ、被災した高校及び地域への貢献活動として復興後を見据えた物産販売、観光紹介等を県内高校生と被災地高校生が行うことにより、商業を学ぶ高校生がその力を被災地復興に役立てることを目的とした。

この目的を達成するため、この企画を「復興貢献プロジェクト」とし、このプロジェクトを通し、あわせて以下の教育成果の実現を目指す。

- ①復興資金を提供するという活動を通して、寄付とは異なる復興貢献を学ぶ
- ②大災害に対して積極的な解決策を考える姿勢を育てる
- ③神奈川と東北4県の高校生ネットワークを構築し、互いに協働し合う新たな学校間交流への発展を目指す
- ④商業を学ぶ高校における特質ある実践活動を通じて商業本来の意義を学ぶ

イ 主催

神奈川県商業教育研究会(県内36校加盟)

ウ 協賛

東日本旅客鉄道株式会社横浜支社、株式会社崎陽軒、株式会社梅屋、平塚青年会議所、株式会社東横イン、横浜薬科大学、全国商業高等学校協会 他

エ 内容

東北各校の開発商品及び各地の物産販売、観光

紹介、各地域の不足物資支援の募集、募金

オ 日時

平成23年7月30日(土)、31日(日)11時～18時

カ 会場

横浜駅西口 イベントスペース

平塚駅北口 梅屋デパート入口

キ 参加校

青森：県立八戸商業高等学校

岩手：県立宮古商業高等学校

県立釜石商工高等学校

県立水沢商業高等学校

宮城：(県)一迫商業高等学校

石巻市立女子商業高等学校

福島：県立福島商業高等学校

県立小高商業高等学校

東北8校30名



平塚梅屋デパート前 開会式

神奈川：県立厚木商業高等学校

県立平塚商業高等学校

県立小田原総合ビジネス高等学校

県立相原高等学校

横浜市立横浜商業高等学校

横浜市立みなと総合高等学校

川崎市立商業高等学校

高木学園女子高等学校

藤沢翔陵高等学校

神奈川9校約100名

(3) 実施までの課題

第一は日程調整であり、これは予想外に難しかった。商業関係の高校にとってこの時期は、3年生の進路関係で就職する生徒の指導や会社見学会たけなわの時期であり、また夏休み中のため、各学校で学

校説明会や部活動の合宿等、すでに様々な予定が組まれており調整に難航した。最終的に準備期間等を踏まえ、平成23年7月30日(土)、31日(日)の2日間に決定した。駅前の露天販売を想定していたので、熱中症等の心配もあったが交代しながら販売や観光PRをすることで決まった。

第二は場所の問題であった。教育活動の一環であること、販売をして利益はできるが収益金は支援金として寄付することを理解してもらい、原則として無償提供してもらえる場所探しをすることにした。

横浜会場は、みなと総合高等学校と横浜商業高等学校が中心となり、平塚会場は平塚商業高等学校が中心となって関係各所にあたった。駅前一等地の確保は日程や条件面で折り合わず困難を極めたが、東北支援と教育活動を全面に交渉し、様々な人脈をたどることで解決させた。

その結果、横浜会場はJR東日本のご厚意で横浜駅構内を、平塚会場は駅前のデパート梅屋のご厚意で入口周辺をお借りすることができた。また、駅前の募金に関しては許可を申請する必要があり、その他の規則的なものも含めて神奈川県教育委員会、横浜市教育委員会そして平塚市教育委員会からの後援をいただくことで解決した。

第三は、仕入計画や販売予測の問題である。仕入れに関しては資金の関係から買い取りでは厳しいので利益は減ってしまうが委託販売の形でお願いすることを考え、主に東京にあるアンテナショップを通じて仕入れることにした。しかし、仕入れにあたり一番の問題は仕入数量であった。果たしてどのくらいの人に来て、実際に買っていつてくれるか？我々では想像もつかなかったがJR横浜駅での過去の実績やアンテナショップの方々のアドバイスをもとに横浜と平塚、2日分として350万円相当の商品を発注した。また、本部企画として生徒のデザインによるオリジナルリストバンドを作成し、少しでも利益に貢献できるようにした。このほかにも東北各校の開発商品や東北各校が準備した商品を販売することにした。

地震発生後3ヶ月という非常時の中で商品が数量、日時とも予定通りに届くのか直前まで把握ができない状況があり、たいへん苦勞した。



にぎわう横浜会場

(4) 実施内容

2日間にわたり、東北より8校、神奈川県内9校の商業を学ぶ高校生が横浜駅と平塚駅で物産販売や観光紹介などの支援活動を実施した。支援活動による利益はすべて参加した東北8校に地域で役立てる資金として分配することにした。会場では東北参加校のオリジナル開発商品や東北各地の物産販売、ミニステージでの観光地の紹介、学校や地域で不足している物資の寄付の紹介と募金を行った。

商業高校の特色を生かした今回の支援活動では東北4県の行政や観光協会などからの協力もあり、県外の教育関係者や文部科学省初等中等教育局西村教科調査官、全商協会森田理事長と菅原事務局長、神奈川県教育委員会から北村指導課長はじめ指導主事等、多くの方に視察いただいた。東北の生徒たちには神奈川県民の東北を応援する気持ちを伝えると同時に参加してくれた高校生から東北の次世代の元気を伝えてもらうこともできた。また、神奈川の生徒たちの多くが助け合う気持ちと明日の災害に備えた前向きな態度を学ぶことを目的にして積極的に参加してくれた。

反響は非常に高く、新聞・テレビ11社の取材を受け、また予想以上の集客もあり、販売する生徒に対しても「がんばってね！」と心温まる声をかけていただき、多くの方々からたくさん募金もいただいた。東北からの生徒たちは神奈川の生徒ががんばって大声を張り上げながら販売する姿に感動し、神奈川の生徒たちは東北の現状を直接聞くことにより何か少しでも役に立ちたいという気持ちがさらに湧き上がり、「高校生 東北商店街」は大成功に終わった。



西村調査官視察



平塚会場開会式 梅屋デパート前

最終的には約130万円の利益を生みだし、東北各地で役立てる資本金として約16万円を8校に分配することができた。さらに企画当初より計画にあった神奈川の生徒を被災地に派遣することも可能になった。宮城県石巻市の石巻市立女子商業高等学校に、9月22日(木)に神奈川の代表団として4校から4名の代表生徒と私を含めて3名の教員が引率し直接、資本金を手渡しすることもできた。現地ではNPOの協力により石巻の生徒たちとの懇談や被災地視察、女川地区の仮設住宅を訪問した。神奈川の生徒達が直接現地を見て、仮設住宅の方々から日々の生活の苦労話などを聞き、直接肌で感じたことを神奈川のそれぞれの学校で多くの生徒たちに伝えてもらえれば幸いである。

3. おわりに

商業高校で学ぶ生徒たちの魅力は、日々の商業の教育活動の中で培った企画力、発想力を即行動に移せるフットワークである。他県の商業関係の生徒との交流活動は各学校単位では行われているが、神奈

川県の県立・市立・私立が合同企画を組むのは今まで例がなく、商業高校の活性化と新たな特色作りに県全体でこのような催しを行うことは大変有意義なものであった。神奈川県内でも今回のように県立・市立・私立の複数の学校の合同企画は例がないばかりか、他県の高校も複数関わった企画は今回が全く初めてのことであった。実施にあたっては、これほど大規模な企画になるとは思ってもみなかっただけに当初は不安や戸惑いもあったが、皆様のご協力とご理解のもと、予想以上の素晴らしい成果を得られたことに心から感謝したい。

今後も商業教育の魅力を継続的に発信し、商業を学ぶ生徒たちのすばらしさをアピールするとともに、ビジネス教育の発展のために更なる工夫をしながら、継続的な東北地方の被災地支援を模索している。



石巻市立女子商業高等学校訪問



女川町仮設住宅の方々との懇談